

祈りのきずな

5月

レビ記17章～民数記20章

愛知新生教会（愛知） 澁谷 和美（しぶたに かずみ）

1日(水)レビ記17章10～12節

「**生き物の命は血の中にある**」。それゆえに血を食べることを禁じられています。祭壇の上に注ぎかける血の贖あがないの儀式は、命みなもとの源なる神に返すためのものです。神からいただいた命への敬意と感謝を忘れがちな私たちにとって、人間以外の生き物の命をも軽視しがちであることを心に留めたいです。

岡山教会と高橋周也ひろや牧師（岡山・岡山市）

2日(木)レビ記18章21節

自分の願いけがいごとのために異教の神に子をささげ、命を奪う行為は神の名を汚すことであると記されています。「子どもの権利条約」が制定されていますが、まだまだ子どもたちの生きるべき命が奪われる、その子らしく生きることが許されない状況があります。命の源なる神はすべての命を尊きようぶ生き方へ招かれています。

松江教会と齋木郷次きよむら牧師（島根・松江市）

3日(金)レビ記19章35～37節

土地は主のもので（25・23）。神は土地を持つものも、持たないものも等しく神の恵みにあずかって生きるよう掟と法を置かれました。「**自分自身を愛するように隣人を愛しなさい**」（18節）とは、私たちが聖なる神を主として礼拝することから導かれるものです。

鳥取教会（鳥取・鳥取市）

※4月号「祈りのきずな」2日

富野教会所在地 誤：小倉東区 正：小倉北区
関係者の方がたにお詫びし、訂正いたします。

4日(土)レビ記20章24、26節

イスラエルの民にとって神の約束は、神と共に約束の地で生きるために必要なものでした。それは他の民族から区別され選ばれた神の民と神とのよき関係を保つためのものでした。私たちは、イエス・キリストによって愛と許しの関係にいます。ただ神の愛を信じて生きる、うれしい歩みです。

姫路城西教会と辻眞理子牧師（兵庫・姫路市）

5日(日)レビ記21章6、17節

祭司は神と民を繋ぎ、人びとの罪を贖う大切な働きをするため「聖であること」がとくに必要とされてきました。そこに障害のある人は入れられませんでした。しかし、神の子イエスは病や体に障害のある人たちに直接手をのびし、癒され、罪や汚れから解放していかれました。神の前にはどの人も尊い存在なのです。

明石教会と椿本博久牧師（兵庫・明石市）

6日(月)レビ記22章31～33節

神さまはイスラエルの民を特別に選び、ご自分の民とされました。エジプトでの奴隷生活から救い出し、約束の地に導かれた方です。その方を礼拝するとき、精いっぱいのおさげものをします。その心を神さまは喜ばれ受け取られるのです。それはイエスさまによって救いにあずかった私たちも同じです。

神戸伊川教会と鮫島泰子牧師（兵庫・神戸市西区）

7日(火)レビ記23章37～43節

モーセに告げられた主の祝祭日の規定は、神が起こされた出エジプトの出来事をはっきりと記憶し続けるためのものです。神によって聖別されたイスラエルの民は神の前に安息し、聖なる集会をすることを通して、神の民とされた喜びの歩みを思い起こし、主において一つとなることができるようです。

神戸西教会と松本^{あさひ}理牧師（兵庫・神戸市垂水区）

8日(水)レビ記24章18～20節

「目には目を、歯には歯を」。これは報復の正当化を言っているのではなく、過度の報復を禁じたもののようです。しかし、イエスさまは「敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」(マタイ5・44b)とされました。同害報復は復讐の連鎖を生み出しかねません。イエスさまは更に勝った平和への道を示されます。
神戸教会と井形英絵はなえ牧師(兵庫・神戸市中央区)

9日(木)レビ記25章10、55節

安息日は人も家畜も含む労働からの解放でした。安息年は作物を生み出す土地への安息です。またヨベルの年しきょうは嗣業の土地を取り戻す希望の年であり、全住民への解放の宣言でした。所有は所有欲を招き、所有物への執着を生み出します。「土地は主のもの」(23節)との言葉は私たちをさまざまな欲からも解放します。
神戸国際教会 ※活動休止中

10日(金)レビ記26章44～45節

神の祝福と呪い。神の民は契約に生きる民です。神への信頼を失い、背を向ける時、国も民も進むべき道を見失い、恐怖と不安と猜疑のなかに沈み込みます。神は人間たちの弱さ、欠け、不完全性を知っておられます。それゆえに何があっても民を見棄てることなく、立ち帰りを待ち続けられるのです。
浜甲子園教会と森山一弘かずひろ会員代表(兵庫・西宮市)

11日(土)レビ記27章30節 a

「土地から取れる収穫量の十分の一は、…主のものである」とあります。私たちがいただいているものはすべて神からのものです。それゆえ、私たちもまたいただいた恵みの中から十分の一を主にお返しして感謝を表します。たとえ十分にお返しできなくても神はその思いを受け取ってくださいています。
尼崎教会と長尾知明ちあき牧師(兵庫・尼崎市)

12日(日)民数記 1章44～46節

神の命によって民の人口調査が行われました。12部族ごとの数字はエジプトでの苦難にもかかわらず、神の守りの中にあつたことを示しています。それは部族をひとつも失なうことなく約束の地に導こうとされている神の意志の表れでもあります。神の恵みと憐れみは今も変わりありません。

神戸新生教会と舟橋恵子責任者（兵庫・神戸市東灘区）

13日(月)民数記 2章32～34節

神の臨在の幕屋の周囲に距離を置き、12部族が置かれました。東側の正面にユダ族から始まり、南、西、北とその位置が決められ、人びとは片側に神を見つつ、部族ごとの結束によって孤立を防ぎ、また神の民全体の存続を確かにしていっているようです。すべて主がモーセに命じられたとおりに行われました。

伊丹教会と内田裕二牧師（兵庫・伊丹市）

14日(火)民数記 3章12～13節

神はレビ人の長子と家畜をイスラエルの諸部族の中に生まれた初子に代わって神の所有とされました。それはエジプトの国で主が打たれたすべての初子の命の身代わりでした。「神のものとされる」という言葉の重みを恵みとしていただきつつ、幕屋での働きに召されていったのでしょう。

宝塚教会と南雅夫牧師（兵庫・宝塚市）

15日(水)民数記 4章17～20節

神は再びレビ人の人口調査を命じられます。臨在の幕屋で従事することのできる30歳から50歳までの人数を調べるためでした。神はモーセに命じて一人ひとりの命の守りに配慮して仕事を割り振られます。神の怒りに触れて死を招くことがないように。神に近づくことは、各自の命の本質が問われることでもあります。

豊中教会と今給黎眞弓牧師（大阪・豊中市）

16日(木)民数記5章11～31節

姦淫の疑惑を持たれた妻への判決法があっても、男性の場合はありません。当時の家父長制社会において女性は男性に所属する存在であったからです。時が流れても性に対する差別は今も変わらず続いています。しかし、そのような歴史の幕が下りる時は一步一步近づいているのではないのでしょうか。

和歌山教会と調しらべみにくくに牧師（和歌山・和歌山市）

17日(金)民数記6章22～27節

祭司による祝福は神の名を置くイスラエルのすべての人びとの上にあります。神の子イエス・キリストの十字架の出来事は、神の祝福をすべての人のためのものとしてくださいました。民数記のこのみ言葉を私たちは礼拝において神からの祝福と派遣の言葉として聞くことができます。

奈良教会と葛西隆憲牧師、平山利香伝道師（奈良・奈良市）

18日(土)民数記7章10～11節

幕屋が建て終わったとき、民の代表による祭壇奉獻がユダ族から始まりました。どの部族も財力、人数に関係なく同じものをささげました。「一日に一人ずつささげなさい」。聖書がささげものの内容を繰り返し記しているのは、神の民としての12部族のささげものを大切なものとして祝福し受け入れてくださっているからです。

みささぎ伝道所と岡村ゆり伝道師

19日(日)民数記8章5～14節

レビ人の聖別の儀式が始まりました。体の清め、ささげもの、共同体の民による按手、祭司アロンによる罪を贖うための儀式、それぞれが役割を担って行ないました。レビ人が神への奉納物とされ主のみ前に差し出されたのは、決してレビ人が優れているからではなく、神の選びです。それぞれに神の選びによる働きがあるのです。

堺教会と平良たいら仁志ひとし牧師（大阪・堺市北区）

20日(月)民数記9章15～23節

主のための幕屋が建てられると雲が幕屋を覆い、夜、雲は燃える火のように変わりました。雲が幕屋から離れて移動するとき人びとは旅立ち、雲が幕屋にある時はその所に留まりました。留まる時間がたった一晩であろうと主の命に従った、とあります。神の臨在を示す幕屋と雲が共同体の歩みを整えていくのです。

関西黎明教会と江田治男牧師（大阪・東大阪市）

21日(火)民数記10章33～36節

エジプトを出て第2年目、彼らは部族ごとに旗を先頭に、シナイの荒れ野を旅立ちます。3日の道のりを主の契約の箱が民の先頭を進み、主ご自身が休む場所を探してくださいました。主の箱が出発するときも留まるときもモーセは雲の中におられる主に呼びかけます。荒れ野での神と共にある旅に導かれる幸いがあります。

東大阪教会と柴田良和・中村尚子各牧師（大阪・東大阪市）

22日(水)民数記11章10～17節

民の激しい不満に対し、モーセは負いきれない重荷に苦しみ、神の前に心を注ぎ出しました。肉を食べたいという人びとの声の前に彼は無力でした。主は70人の代表を選び、モーセの重荷を担わせました。一人では負えなくとも助け手があればできます。教会の始まりと思える働きがここに起こされています。

シオンの丘教会と坂田浩協力牧師（大阪・藤井寺市）

23日(木)民数記12章2～4、9～15節

モーセの同労者ともいえるミリアムとアロンの妬みと思える言動。しかしモーセの謙遜を神は重用されます。神は彼らをご自身の前に立たせ、二人に対し怒りを発しました。ミリアムは神によって重い皮膚病にかかり、7日間宿営の外に隔離されます。民はミリアムの回復を待ちました。待つ時は神との関係性を見直す時でもあります。

平野教会（大阪・大阪市平野区）

24日(金)民数記13章30～33節

約束の地カナンの偵察が12部族の代表によって行われました。彼らは土地の実りを携え、ともに約束の地の豊かさを伝えます。カレブとヨシュアは、約束の地を占領できると伝えますが、他の指導者は無理だと判断し、人びとの士気をくじめます。主が約束された地、そこに何を見るかが問われます。

田辺教会と喜多村やよい牧師（大阪・大阪市阿倍野区）

25日(土)民数記14章33～34節

偵察の報告は多くの民にとってつまずきとなり、モーセとアロンに対する反逆のうねりを起こします。その結果は厳しく、荒れ野の旅は40年となり、第一世代は老いて約束の地に入ることなく命を取られることとなり、第二世代もまた親たちの罪を負うことになりました。神もまた痛みつつ、民を導かれたのです。

大阪教会と下川俊也牧師（大阪・大阪市天王寺区）

26日(日)民数記15章1～21節

ささげものに関する補則には荒れ野の生活で手に入らないものが含まれています。小麦粉もぶどう酒も新しい地での農耕生活を前提としているものでしょう。約束の地での豊かな作物の実りを喜ぶ生活を望みつつ、彼らは荒れ野の今を生き続けます。そこはまた主の前にすべての民が区別なく生きる生活でもあります。

大阪旭伝道所と中島義和牧師、中島久子副牧師（大阪・大阪市旭区）※休止中

27日(月)民数記16章1～3節

モーセとアロンに対し、250名もの共同体の指導者を仲間に引き入れ、徒党を組んでコラは反逆します。「**なぜ、あなたがただけが主の会衆の上に立とうとするのか**」。それは自分たちを約束の地に導き入れることもできないリーダーに対する不満でもあったのでしょう。モーセは彼らの選びの主権者、主のみ手に解決を委ねます。インドネシア伝道と野口日宇満・野口佳奈各宣教師の働きのために

28日(火)民数記17章6～15節

長い荒れ野の旅は人びとの心を疲弊させました。コラの事件をきっかけに共同体の民の不満がさらに大きくなった結果、神の罰としての疫病が多くの命を奪い、その死者の数はコラの時を上回ります。アロンによる罪の贖いの儀式が人びとの命を救います。彼はたとえ人びとに否定されていても祭司としての勤めを果たしました。

国際ミッション・ボランティアの働きのために（佐々木和之氏・ルワンダ）

29日(水)民数記18章1～7節

レビ人は祭司と民の仲介者としての位置にあります。イスラエルの民と神の関係を維持するために彼らが主の聖所の働きをします。祭司もレビ人も共に恵みの働きであります。また死と隣り合わせの働きでもあります。主からたてられた厳しい責任を伴う働きに、主は日々の生活の安定をもって答えられます。

シンガポール国際日本語教会（IJCS）の働きのために

30日(木)民数記19章7、11～13節

祭司は民の清めのためその身に汚れを負い、自身の清めを必要とします。死体も不浄であり、触れたものも汚れを負い、清めを必要とし、清めることがなければ民から絶たれるという厳しさがありません。汚れからの清めは、聖なる方を聖とするために重要であり、共同体を守るものであったのです。

APBAid（アジア太平洋バプテスト連合救援委員会）のために

31日(金)民数記20章7～13節

水の渇きはつらいものです。民は徒党を組んでモーセとアロンに激しく訴えました。神はモーセに人びとの前で杖を取り、岩に向かって「水を出せ」と命じるようにと言われました。しかし、モーセは杖で岩を二度も打ってしまいました。水は湧き出て民の渇きはいやされましたが、それは神の前に大きな罪となりました。

福島移住女性支援ネットワークのために